

廢名『莫須有先生伝』訳稿（六）

Fei Ming's Moxuyouxiansheng zhuan：A Transportation（6）

張 雪晶*・山田 史生**

Xuejing ZHANG*・Fumio YAMADA**

要 旨

廢名（1901～1967）の前衛的小説「莫須有先生伝」の翻訳。『廢名集』第2巻（北京大学出版社）所収に拠る。

キーワード：廢名 莫須有先生

第十三章 この章では不思議について語る

空には太陽がきらきら、春の日差しはぼかぼか、人生には寒いときもあれば暑いときもあるけれども、莫須有先生は雲のように行方も知らずただようばかりで、いまはというとステッキをもってくるのを忘れてしまったのだが、それでも目がわるいひとのようなふりをして、だれとあっても挨拶ひとつするでもなく、ひろい大通りにあって、まるで影と競争しているみたいに、どんどん早足になって、すれちがったひとたちが口をそろえていうには、

——今日はまた莫須有先生はなにがあったっていうんだい？ あんなに大急ぎであるいたりして、こっちをまるっきり無視しているよ！ 用心しないと石につまづいて鼻っ柱をぶつけでもしたらえらいことだよ！

じつをいうと莫須有先生の目がきくことときたらすばらしくて、道ゆくひとをみるとなったら、十歩以上はなれていてもちゃんとみえているのであって、はにかむような顔をしながら、みずからしゃべってみずからわらっているんだけど、あちらからやってくるのは大家のおばさんのようで、まちがない、吾輩はふだんからおばさんのことをカッコをつけるところがあるところからかっており、髪に花をかざるのが好きみたいなんだけど、この「おばさん」というよびかたについては、吾輩はこのさい明言しておかねばならぬとおもっていて、それはいくらか考証とでもよぶべきことなのだけど、山東省の済南府あたりではお女中とよぶらしく¹、典故をしらべるべき書物はみつけれなかった

のだが、寒さきびしい冬のこと、あるひとが車におしこまれ、ふたりの友人に無理やりに大明湖につれてゆかれ、ほとんど凍死しそうになり、とりあえず外套をはおってはいたけれども、それは虎豹の毛だというのに、まるで犬羊の皮のようで、あの獵師がまったく武松のことを獣とみわけられなかったように、それはもう元気ハツラツ、われわれは鼻水でグズグズの鼻のうえについた目をキラキラとかがやかせ、ちょうど目に飛びこんできたのは「どの酒店がよかろうと李白がいう」という看板、どの酒店というのは飲み屋のことで——どのうちも厄よけのお札をはりつけているのはもう正月になっちゃったの？ われわれはどうして外をはしまわっているの？ 居酒屋のとなりにあるのは看板にまちがないくて、「おばさんのおすすめ」とあるけど、おばさんというのはお女中のことにちががなく、おばさんの語の由来はこれだろうから、いつか必要になったら吾輩はこれを典故として使うことにして、はは、むこうのほうからおばさんがやってくるけれども、おばさんは莫須有先生をみるとちょっと照れくさそうにして、腰の巾着にはなにかはいっているらしいが、きっと大家の目をぬすんでこっそりくすねてきた米にちががなく、あるいは若い娘が身につけるシャツかなにかなのかもしれないが、おやまあ、ちょうど休暇をとって家へともどる途中らしく、こそこそと身をかわし、まるで吾輩にみつきたくないみたいで、どうやら吾輩がだれかに告げ口することを心配しているようだが、吾輩がいまだかつてだれかに告げ口したことがありましたか？ だれでもよいからたずね

* 陸奥新報社

** 弘前大学教育学部国語教育講座

1 老嗎子 旧時指年齢較大的女僕。也叫老嗎兒（『現代漢語詞典』第7版）

てみればよろしい！なるほど林ちゃんが腹をたてるのも無理はないけれども、とりあえず無視してほうっておくことにして、吾輩はひとまず鶴のように軽やかな足どりできつさといなくなるに如かずというわけで、まさにそういうふうには、よい按配にちゃんと遠ざかってゆき、莫須有先生はひとりっきりで孤独にあるきつづけ、だれかに頼ることなど微塵ももとめることなく、そのくせしょっちゅう面倒なことをやらかすのだが、おやおや、なにをぶつぶつとつぶやいてるの？

まさか吾輩の鼻のことをからかっているのかな？

「石ころにつまづいて鼻がつぶれたりしないように気をつけなさいよ！」ってたしかにそれはたまったもんじゃなくても、そこは莫須有先生であるから、そんな些細なことは意に介さないわけで、どこのうちの女の子だったか吾輩のためにインド人という渾名をつけてくれたことがあって、それは吾輩は鼻が高く、肌が黒いからであるが、それよりも吾輩のあるくすがたが素敵であるのは魂がうつくしいからだとホメてくれているのである。ところが莫須有先生はそれをきかないうちはよいのだが、いったん耳にはいろいろもんならほうっておくことができないわけで、このからでは父母よりさずかったものだからどうしようもないものなのだよ！² すると腹をたててしまうのはどうしようもなく、腹をたてればそれをおのれに釈明せねばならなくなり、ひとはだれしも興奮するときはあるわけで、まっすぐにどこまでもゆけばよく³、まっすぐなところで恨みにこたえればよく⁴、そのつどなりゆきにまかせればよく、いちいち気にかけることはないのであって、だからわが夫子は孺悲にあおうとしなかったのであり⁵、文王がいったん怒ろうものなら天下のひとびとを安んじたのだし⁶、車はもっとゆっくりはしって、吾輩がたちどまるのを待って、吾輩はひとを叱りつけたいのだ！ すぐさまクルリと向きをかえたかとおもうと息せききっていうには――

「ちょっと、そこのおばさん、こっちへきて、吾輩はあなたにいいたいことがある！ あなたはどうして吾輩のことを皮肉なの？ あなたは――どうしたの？ どうして向きをかえてもどっていつちやうわけ？」

「莫須有先生、イヤんなっちゃう、あたしのhandkerchiefが風にふきとばされて、ほらあそこ、あそこの木の枝にひっかかっちゃったから、あんたあたしのかわりに拾いにいってくれないかしら、お手数だけど」

「あの白いのがそう？ 風がふけば草はなびく⁷――あれがあなたのなの？ さっきみていたらあなたはハ

ンカチをちゃんとポケットにもどしていなかったっけ？」

「あたしのだよ、あれはうちのお嬢さんがあたしにくれたやつで、あのひとはそろそろ病も癒えるところで、昨日は奥さんも山にのぼってきていうには、まもなく町のほうへ引越してゆくつもりらしくて、うちのお嬢さんのいうにはあたしもいっしょにつれてゆくらしいのよ」

ということはあなたは町のほうに雇われにゆくわけだね。莫須有先生はひとまず高いところにのぼってあたりをながめる。どうやらお嬢さんは療養のためにこちらにきていたようで、吾輩はすぐれたおこないを身におさめるのである⁸。こころのなかで貧しきものには幸いなるかなとおもい、というのも天国はかれらのものであるから！⁹（按ずるに、ここに注があって、この大通りは山のほうからおりてきていて、このまま南のほうにゆけば八大処までつづいている）

「しまった、吾輩の帽子も風に飛ばされてしまった――いそげ！ いそげ！」

「大丈夫、大丈夫、あたしがつかまえる！ あたしが

- 2 身体髪膚は之を父母に受く、敢て毀傷せざるは、孝の始めなり（身体髪膚、受之父母、不敢毀傷、孝之始也）『孝経』開宗明義章第一
- 3 子曰く、吾れの人に於けるや、誰をか毀り、誰をか誉めん。如し誉むる所の者有らば、其れ試みる所有るなり。斯の民や、三代之直道にして行なう所以なり（子曰、吾之於人也、誰毀誰誉。如有所誉者、其有所試矣。斯民也、三代之所以直道而行也）『論語』衛靈公第十五
- 4 或ひと曰く、徳を以て怨みに報ゆるは何如。子曰く、何を以て徳に報いん。直を以て怨みに報い、徳を以て徳に報いん（或曰、以徳報怨何如。子曰、何以報徳。以直報怨、以徳報徳）『論語』憲問第十四
- 5 孺悲、孔子に見えんと欲す。孔子、辞するに疾を以てす。命を將なう者、戸を出づ。瑟を取りて歌い、之をして聞かしむ（孺悲欲見孔子。孔子辞以疾。將命者出戸。取瑟而歌、使之聞之）『論語』陽貨第十七
- 6 文王一たび怒りて天下の民を安んず（文王一怒而安天下之民）『孟子』梁惠王下
- 7 季康子、政を孔子に問いて曰く、如し無道を殺して以て有道を就さば何如。孔子対えて曰く、子、政を為すに、焉くんぞ殺を用いん。子、善を欲すれば、民善なり。君子の徳は風なり。小人の徳は草なり。草、之に風を上うれば必ず偃す。（季康子問政於孔子曰、如殺無道以就有道何如。孔子対曰、子為政、焉用殺。子欲善而民善矣。君子之徳風也。小人之徳草也。草上之風必偃）『論語』顔淵第十二
- 8 勝業とは「勝妙の行業なり」（織田得能『仏教大辞典』大蔵出版）。
- 9 イエス口をひらき、教へて言ひたまふ、幸福なるかな、心の貧しき者、天国はその人のものなり（「マタイ伝福音書」第五章）

つかまえる！」

「ほら、こうして自分のものをうしなってみれば、吾輩はもうすっかり手も足もでなくなって、どうしてよいやらわからなくなってしまった。吾輩はこんな話をおもいだしたのだが、むかし維摩詰の住まいにおいて、天女が菩薩たちや釈迦の大弟子たちのうえに花をふりかけると、菩薩のからだのうえの花びらはすぐに落ちたが、大弟子のからだのうえのものは落ちなかったというけれども¹⁰、それはみずから分別を生じたにすぎないのですよ¹¹。吾輩がこんなふうになったらどうになってしまうのかな？ あなたに面倒をかけるけれども、いそいで！ いそいで！ 助けの手をさしのべておくれ！」

「あたしがこの足でふんづけてあげるよ！」

その足はふんづけられなかったが、すでに五十歩百歩というところまで迫っていて、ところが莫須有先生は道ばたにつつまのまま腹をたてており、たちまち口をとがらせ、一言もしゃべろうとせず、帽子もかぶらずに世のなかをながめている。そうやっていると、風が髪をふきちらす。

「ふむ、あなたのせいにはできなくて、それはみずから分別を生じたにすぎないようだ。ただし物書きというやつは憎たらしくて、お婆さんはご存じなからうが、あいつはお婆さんが小便をしたがっているといつて、兄嫁が溺れそうになったら手をとって助けるというけれども¹²、溺という字は¹³、『説文』の水の部にあり、水がらみのことで、弱の音をとり、いまのひとは小便をさす尿の字をもちいるようだね」

「あんたはイヤなひとだね、もうおしゃべりしたくないよ——あたしのハンカチを返してちょうだい！」

いきなり一輪のバイクがはしってきたので、莫須有先生はあたふたしてしまい、唐の坊主は念仏をとたえ、この化けものめ、イヤだったらイヤだ、まったくホコリまみれで、やっこのことで眼をあけてみれば、この世にたったひとりっきりで、やはり吾輩はなにものをも恐れぬ精神でもってどこまでも前進してゆこう。

この大通りはというと、山のうえをグルリとひとめぐりしてから、そのまま八大処へとつづいており、そこに足跡をのこした数でいえば莫須有先生がいちばん多く、朝に曇っていようと暮れに雨がふっていようと、傘をさしながらロバにのって、それはもうなにかあろうとも、授業のときとなれば点呼をとったり板書をさせたり女子学生のほうを横目でちらちらカンニングしたりするやつらにとことんまで説教をしたり、こ

こはまさに東交民巷のバイクのたまり場であり、ここはまた斉という盲人があらわれる場でもあり、斉という盲人はただの目のみえない占い師にすぎないのだが、山の北に住んでいるのに、わざわざ山の南にやってきて占いをし、あるとき莫須有先生はやっこさんが月ののでている晩に杖でさぐりながら帰ってゆくのをみかけたことがあって、そのとき莫須有先生はちょうど望夫石のうえにすわって¹⁴月の女神をしのんでいたのだが¹⁵、やっこさんはどうやら今日の商売はうまくいったらしく、たとい吾輩が声をかけたところで耳をかしてくれそうもないし、それに吾輩はもともと孤独をもとめてここにいるのであってみれば、だったらあの盲人に声をかける必要なんてないよね？ そもそも吾輩としてはやっこさんの存在を「自然」とみなしておけばよいのであって、莫須有先生、あんたは勝手にひとりで悦に入っておればよく、じっさいあんたはホタルの光ほどにしかあたしにはみえないんだよ。そういつてから莫須有先生はハハと高笑いし、こうやって吾輩をずっと批評家のようにさせてきたわけで、ひとつやっこさんをこっぴどく叱ってやらねばならぬ。これはのちの話であって、ひとまず横においておくとして、莫須有先生は車の去ってゆくすがたをながめやり、たちまち意気消沈してしまい、もう時間をムダに過ごすことはできぬ、吾輩はもう三ヶ月ものあいだ完全にボンヤリとすごしてしまったのであって、そうこうするうちに幾重にもつらなる山をのぼりつくしていた。曲がり道にでくわすたびに道なりに曲がればよいだけであって、いつかあなたがこの道のあるとき、もし信じられぬならば一軒の茶屋があるからきいてみ

10 『維摩経』観衆生品

11 仁者自ら分別を生ず（仁者自生分別）『祖堂集』巻三「一宿覚和尚」

12 淳于髡曰く、男女授受に親らせざるは礼か。孟子曰く、礼なり。曰く、嫂溺るれば則ち之を援くに手を以てせんか。曰く、嫂溺れて援かざるは是れ豺狼なり。男女授受するに親らせざるは礼なり。嫂溺れ、之を援くに手を以てするは権なり。曰く、今天下溺る、夫子の援けざるは何ぞや。曰く、天下溺るれば之を援くるに道を以てし、嫂溺るれば之を援くに手を以てす。子手もて天下を援けん欲するか（淳于髡曰、男女授受不親、礼与。孟子曰、礼也。曰、嫂溺則援之以手乎。曰、嫂溺不援、是豺狼也。男女授受不親、礼也。嫂溺援之以手者、権也。曰、今天下溺矣、夫子之不援何也。曰、天下溺、援之以道。嫂溺、援之以手。子欲手援天下乎）『孟子』離婁上

13 溺 ni 落水、淹没 niao 小便、同「尿」

14 望夫石は「古迹名。各地多有。均属民間伝説、大同小異」（『辞源』第三版）

15 嫦娥は「月神名。初見於山海経大荒西経、作常羲、謂為帝俊之妻」（『辞源』第三版）

ればよく、またもし莫須有先生をたずねたいとおもうならば茶屋の主人にきいてみればよくて
——もしもし、ご主人、すみません、ここに莫須有先生はいらっしゃいますか？

かれはきっと大喜びして、ああいるよと答えてくれ、十四番地、玄関のところに4本のエンジュの木の植えてあるうちがそうだよ。そのとき店のなかから奥さんがあらわれてきて、どうしてもあなたの素性を根掘り葉掘りたずねてくるという次第にならざるをえず、あなたはどの町からやってきたの？ どこの役場ではたらいしているの？ たといあなたが大学出だといったところで洩もひっかけてくれぬにちががなく、それというのも甥っ子がせっかく警察学校で勉強したにもかかわらず、いまだに大隊長になっていないからである。莫須有先生はだんだん怒りがこみあげてきて叱りつけたくなり、とうとう家主の奥さんにむかって怒鳴ってしまい

——あなたたち旗人ときたら！¹⁶ 男なら兵隊！ 女ならお女中！ ああ、吾輩にはまったくもって納得できません！

この茶屋のほかに、もうひとつ記憶にのこるものがあった、それはわれわれ没落した家々がそれぞれいくらか醸出しあって深いところまでとどく縄を買いなおした井戸で、柳の影が深いところまで映っており、その蓋のない井戸のわきの桃の木のかたわらで、いくたりかがしょっちゅう井戸端会議にふけており、くみあげる釣瓶はほったらかしたまま、莫須有先生はその桃李精神ともいうべきオウムのおしゃべりのようなムダ話ぶりがうらやましく、ただ黄河以北の atmosphere がただよっているというだけなのに、それによって郷愁の念がつのってきて、ちょうどこうして関所までやってきてみれば、ひと飛びに飛んで逃げてゆきたいとおもっても、もうすでに女たちにみられてしまったから、ほら、ひそひそ耳打ちしあっているけれども、やっぱり吾輩についてなにかしゃべっているんじゃないの？ 吾輩のなにについてしゃべっているの？ そこで莫須有先生はこうなったらもう姑息な手段をとるよりなかりと¹⁷、すぐさま足をとめて、なにか妙計はなかりかと思案するけれども、ほどこすべき手はいっこうに浮かんでこず、不覚にもつい西施よろしくひとびとのまえで胸をおさえて眉をひそめてしまったが¹⁸、すると女たちは狼煙のあがるのをみた褒姒さながらに大笑いしており¹⁹、莫須有先生は耳まで真っ赤になって、どうしたらよいかわからず、とりあえず知らんぷりをすることにしたが、ひとりが忍び足でこち

らのほうにやってきて、莫須有先生のうしろにくっついてくると、どんな本をよんでいるのかみせておくれ！ 莫須有先生はまるで水平線から斜めにみるような近視のまなざしで

——あなたは字がよめるのかい？ 吾輩はわざと詩集を逆さまにもっているのさ！ 吾輩はそれでもって耳目をささげるのだよ。今日のおでかけも、この詩集に何とか助けてもらったよ。

すぐさま修正するという

——誤解されないようにいっておくと、吾輩のこの近視のまなざしにはさしたるわけがあるわけじゃなくて、ほら、吾輩がこうやってあなたたちをみているのは、じつをいうと schoolmaster が『群強報』なんかをよむのをからかっているだけなんだよ。

この女はあわてて四つん這いでもどっていったが²⁰、なにかしら得たものがあるにちががなく、莫須有先生はこれを目でみおくりながら、ケンカをするつもりならひとりできちゃいけないよという。そのとき水くみ場のほうでなにやら音がしたので、おもわずそ

16 旗は「3 属于八旗的、特指属满族的」八旗は「清代满族的軍隊組織和戸口編制、以旗為号、分正黄、正白、正紅、正藍、鑲黄、鑲白、鑲紅、鑲藍八旗。后又增建蒙古八旗和漢軍八旗。八旗官員平時管民政、戰時任將領、旗民子孫世代当兵」(『現代漢語詞典』第7版)

17 鶏鳴狗盜は「戦国時、齊孟嘗君好客、之秦、秦王留之不使歸。客有能為狗盜者、盜千金之狐白裘、以獻秦王幸姬、王從幸姬之請、遣孟嘗君歸。旋悔而追之。時孟嘗君已至関、関法、鶏鳴而出客。客有能為鶏鳴者、一鳴而群鶏盡鳴、遂得出関。見史記七五孟嘗君伝。後以称有卑微技能者」(『辞源』第三版)

18 故に西施、心を病みて其の里に躡するに、其の里の醜人、見て之を美しとし、帰るも亦心を捧げて其の里に躡す。其の里の富める人は之を見るや、堅く門を閉ざして出でず、貧しき人は之を見るや、妻子を挈えて之を去てて走ぐ。彼は躡むるを美しとするを知るも躡むるの美しき所以を知らず。惜しいかな。而の夫子は其れ窮しまんか(故西施病心而躡其里、其里之醜人見而美之、婦亦捧心而躡其里。其里之富人見之、堅閉門而不出、貧人見之、挈妻子而去之走。彼知躡美而不知躡之所以美。惜乎。而夫子其窮哉)『莊子』天運篇

19 褒姒は「周時褒国女子、姒姓。周幽王伐褒、褒侯進褒姒、為幽王所寵幸。性不好笑。幽王悦之万方不得。乃举烽火以召諸侯、諸侯急至、而無外敵入寇事、褒姒大笑。幽王遂数举烽火、以博褒姒之笑。後申侯与犬戎攻周、幽王又举烽火、諸侯以為戲、不至、幽王被殺」(『辞源』第三版)

20 且つ子独り夫の寿陵の余子の行みを邯鄲に学ぶを聞かざるか。未だ国能を得ざるに、又其の故き行みを失う。直だ匍匐して帰るのみ。今子去らざれば、將に子の故きを忘れ、子の業を失わんとす(且子独不聞夫寿陵余子之学行於邯鄲与。未得国能、又失其故行矣。直匍匐而帰耳。今子不去、將忘子之故、失子之業)『莊子』秋水篇

ちらのほうをむくと、おやおや、世界はなんともはや変幻自在であることよ、これは吾輩のほうで唐突にそうなったわけじゃなくて、あちらの鏡台のまえて化粧をしてから着飾ったうえで水をくみにやってきましたらしいお高くとまったお嬢さんのせいにちがいがなく、吾輩としてもそのうしろすがただけをみて満足しているわけにもゆかず、おやまあ、これはまたなんとクラシックであることか、世間におけるあるべきありかたとしては淑女たるものただ着飾りさえすればよいというものじゃなくて、春風をまとうというのもまた身だしなみであり、それでこそ真に自由なのであり、うごいたりしずかだったりするからこそ、もっぱら物憂げであるばかりの一幅の絵画よりも人生をふるいたたせてくれるのであって、そのとき莫須有先生はまだ道ばたにたたずんでいたのだが、まさにこの時この所はというと落ちこんでいる場合じゃなくて、そのとき木にとまっていた鳥がいつせいにパタパタと飛びたつてゆき、木陰に鶴がすくとたっているように建てられている巨大な機械にむかっておもわせぶりな口ぶりでは

「これって井戸水をくむハネツルベで、ひっぱればさがってゆくし、ほうりだせばあがってくるんだけど、ただそのお嬢さんはしっかりと足をふんばらなきゃいけないって、っていうか、まあ吾輩のいうことなんてどうでもよいわけだけど、いったい春風がどうして木の葉を散らすことがあるかという、これがこの世のすがたであって、あなたは地の音をきいたことはあっても天の音をきいたことはなかるう」²¹

「莫須有先生なにしてるの？ 散歩してるの？ 今日はいよい日和だこと」

「お嬢さんこそなにしてるの？ たしかにおっしゃるとおり、吾輩はあなたがたのこの北の気候がすこぶる気に入っていて、ヤナギがあたらしい芽をふくころだというのにまるで秋空が高くてシカの鳴く声がきこえてくるみたいで、まさに春の松と秋の菊とが同時にあることができるだろうかといった風情であるけれども²²、とはいえ吾輩としてはやっぱり江南の雲がみえないなあとおもうし、また雨あがりに香りのよい草が暮れなすむ夕日に照らされているのをボンヤリとながめていたくて²³、だから吾輩はどうしてもつぎの素敵な詩句をおもいだしてしまって、「ぼくの君をおもう気持だけは春に似ていて、江南江北と春のいたらざるところなきようにぼくが君の帰るのをおくってゆかぬところはない」²⁴、もし吾輩がこの季節にふるさとにもどるとすれば、お嬢さん、長江をわたったとたん、

青い草がすぐさま吾輩のあとをついてきて、それはむかしの女のひとが歩くにつれて蓮の花がさきみだれるようでおもしろいとおもうよ」²⁵

「莫須有先生、ここからあなたのふるさとまでゆこうとおもったら何千里もあるんだろうけど、いつかあたいらを船にのせて遊びにつれて行ってちょうだい。あたいらはまだだれも船をみたことがないから、どうか見聞をひろめさせておくれ」

莫須有先生がふりむいてみると、それはさきほど敵陣をまえに逃亡したものが横から口をさしはさんできたのであって、いまその女はむこうのほうで所在なげに²⁶、膝をかかえてすわっており、ヤナギの枝がたれるように首をふらふらさせながら、あっちへゆれたかとおもえばこっちにゆれもどりというふうで、その眉はひどく愁いをおびていて、あたしの問いかけにあんたはどう答えてくれるんだい！ 莫須有先生はちっとも相手になろうとせず、というのも気になっていることがあるからで、まったく、ひとの世でめぐりあう出来事きたら、いま眼のまえにいるひとだって、どうしても光陰が矢のごとくすぎゆくようにスルーせざるをえぬこともあって、そうかとおもえば世間とうまくつきあうすべも学ばねばならぬのだ！ そうとなればだれだってその機微をわきまえざるをえぬわけで、たといなんびとにたいしてであろうともこれを敬して遠ざけるといった姿勢でのぞむことになり

「おねえさん、あなたたちがこの広大な曠野をラバにひかせた車にのって里帰りするというのも乙なものだとおもうんだけど、五里ゆこうが十里ゆこうがひとつ

21 今吾我を喪う。汝之を知るか。女人籟を聞くも未だ地籟を聞かず。女地籟を聞くも未だ天籟を聞かざるかな（今者吾喪我。汝知之乎。女聞人籟而未聞地籟。女聞地籟而未聞天籟夫）『莊子』齊物論篇

22 其の形、翻たること驚鴻の若く、婉たること遊竜の若し。榮は秋の菊よりも曜り、華は春の松よりも茂し（其形也、翻若驚鴻、婉若遊竜。榮曜秋菊、華茂春松）曹植「洛神賦」 来たる時は西館に佳期を阻まれ 去りし後は潭河に夢思を隔てらる 宓妃の無限の意有るを知れば 春松秋菊時を同じくす可けんや（来時西館阻佳期 去後潭河隔夢思 知有宓妃無限意 春松秋菊可同時）李商隱「代魏宮私贈」

23 東風吹柳日初長 雨余芳草斜陽 秦觀「画堂春・春情」

24 惟だ相思の春色に似たる有り 江南江北 君が帰るを送る（惟有相思似春色 江南江北送君帰）王維「送沈子福歸江東」

25 歩歩生蓮花は「南齊東昏侯蕭宝卷窮奢極欲、嘗在宮中為其寵妃潘玉兒製造貼地金蓮、令潘步行其上、稱之為歩歩生蓮花。見南史東昏侯紀」（『辞源』第三版）

26 繫風捕影は「比喻事物虚構而無根拠」（『辞源』第三版）

子ひとりでくわすことなく、もし小雨でもふろうものならなおさら興味があろうというもので、このさい船にのろうなんておもわぬほうがよいですよ」

「もうなんにもいわないで、まったくドキドキさせるんだから」

「そりゃまたどうして？」

「きくまでもないでしょ！」

「この宇宙のなかで吾輩の知るところはすくないけれども、ただときどき妙に推理をはたらかせたくなるときもあるのであって」

こうなると莫須有先生はひどく知りたがりになってしまい、そうなるには理由があるのであって、ちらりとみてみれば、窈窕たる淑女たちは、井戸端にあつまるとのようになり、おねえさんといわれたときからやけに恥ずかしそうに、ほっぺを桃色にそめて、うれしそうにしている。

「あたしんちの竹ちゃんは明日になると花飾りをつけた輿にゆられて町にゆくんだけど、三十里もゆられてゆくってドキドキするわ！」

「バカ！」

どうして竹ちゃんはわらいながら兄嫁をののしるの？ ののしる言葉であるこの2文字について莫須有先生はずいぶんまえからその意味をうまく翻訳したいとおもいながらいまだにできずにいるのだけれども、ただしその真意はちゃんとくみとっている。その機会は2度あって、莫須有先生はそれをどちらも女の子の声からくみとったのである。かわいらしい娘よ、神さまの音楽よ、園のヤナギにはさつきとちがう鳥が鳴きはじめたよ²⁷、あるとあらゆることは人間がどうこうできることじゃないよ、われわれは口うつしにマネができるのかな？ おや、ふむ、ふむ、わがふるさともひとをあざわらうことわざがあって、「いざ車にのろうとすると、かならずオシッコがしたくなる」これってあの女の子から教えてもらったんだって！ 莫須有先生はこの世のなかには優雅と卑俗という別があるのだなあとおもったようだが、これから吾輩がどういうふうに生きてゆくかをみていただきたい。吾輩としては立派になれるように精進したいとおもっている。

このとき太鼓をたたきながらやってくるものがあり、莫須有先生がまだそれに気づかぬうちに、竹ちゃんは遠くのほうを指さして声をあげ

「太鼓のひと、ちょっと！」

身軽にぴょんと躍りあがり、さざ波がひろがるようにそばに寄ってゆくと、おねえちゃんと手をとりあ

て道の両側からはさむようにして太鼓をたたいて天秤棒をかついだ行商をとりかこんで、なにを買おうかな、飴を買おうかしら、莫須有先生はこころのなかでおもったのだが、あんなに遠くはなれて、あんなふう

に必死の顔をしていて、おもわず知らずにおねえちゃんに教えを乞うてしまい、低い声で

「なにを買うの？」

「あの子にきいとくれ！」

「やれやれ、ひとの世に生きていれば、なにはさておき辛抱するというのが大切なことだ。そうだとすると他人のこころを尊重するというのも忘れてはならぬ」

莫須有先生はそこで三舎を避けてみずから頭を冷やそうとする。

「莫須有先生、なんでも字をかくのが上手らしいけど、いつかあたしの扇子になにか字をかいてちょうだいな」

第三者がいきなり口をきいてくる。

「莫須有先生、その子にハエたたきを買ってあげたら」

第四者もまた口をはさんでくる。

「おねえさん、そういう皮肉なことをいわないで、だって君子というのはいつだって仁だろうか、礼だろうかと反省しているものであって、ちゃんとそれをまもれていないと反省したならば、たといひとが無理をいってきても、吾輩はかならずひとを憐れみ、ひとを敬い、おのれを憐れみ、おのれを敬うのであって、そういう聖人の生きかたをみならうのだから、いつだってまちがいをおかさないのだよ」²⁸

27 地塘 春草 生じ 園柳 鳴禽 変ず (地塘生春草 園柳変鳴禽) 謝靈運「登池上楼」

28 孟子曰く、君子の人異なる所以の者は、其の心を存するを以てなり。君子は仁を以て心を存み、礼を以て心を存する。仁者は人を愛し、礼有る者は人を敬す。人を愛する者は人恒に之を愛し、人を敬する者は人恒に之を敬す。此に人有り、其の我を待つに横逆を以てすれば、則ち君子は必ず自ら反みるなり。我必ず不仁ならん、必ず無礼ならん。此の物奚宜ぞ至るべけんや。其の自ら反みて仁にして、自ら反みて礼有るも、其の横逆由お是くのごとければ、君子必ず自ら反みる。我必ず不忠ならん。自ら反みて忠なるも、其の横逆由お是くのごとければ、君子曰く、此れ亦妄人なるのみ。此くのごとくば則ち禽獸と奚ぞ扱ばん。禽獸に於いて又何をか難ぜん (孟子曰、君子所以異於人者、以其存心也。君子以仁存心、以礼存心。仁者愛人、有礼者敬人。愛人者人恒愛之、敬人者人恒敬之。有人於此、其待我以横逆、則君子必自反也。我必不仁也、必無礼也。此物奚宜至哉。其自反而仁矣、自反而有礼矣、其横逆由是也、君子必自反也。我必不忠。自反而忠矣、其横逆由是也、君子曰、此亦妄人也已矣。如此則与禽獸奚ぞ扱哉。於禽獸又何難焉)『孟子』離婁下

「莫須有先生、あんたってほんとうにイヤなことをいうわね！ほんとうにもう面倒くさいんだから！あたいら女っていうのは、こうして地べたにすわって、どうってということもなく、ただおしゃべりをしているだけなのになにかわるっていうの？」

「莫須有先生、なんにも言語をしゃべっちゃダメよ、あのひとは家にいるとき一日中ずっとお姑にいじめられているんだから」

「なるほど、吾輩はいささかみみちかったかな？あなたにたずねてみたいんだけど、吾輩はあなたたち北のひとの方言はちょっと語彙がすくないとおもっていて、たとえば「言語」という2文字を、あなたたちには「原因」のようにつかうけれども、いつだったか田舎のおじさんにたずねてみたら、どうやらそれは「言語」のつかいかたが変わったもので、吾輩のみるところこの2文字にはたくさんの異なる意味があって、たとえばあなたがさっきなんにも言語をしゃべっちゃダメよといったのも、きっとあのひとに口答えしちゃうダメよといったかったのであって、そうでしょ？

そうだね。あるとき吾輩が門のそとから門のなかへとよびかけたところ、家主の奥さんがなかから声をはりあげて

——だれ？ねえ、だれなんだい？どうしてなんにも言語をしゃべらないの？

この言語をしゃべるといのは返事をするという意味だとおもう。またあるときは吾輩にむかって言語をしゃべって

——莫須有先生、ご飯ができたけど、食べなくなったらあたしに言語をしゃべってね。

これは吾輩にはやくご飯を食べなさいとうながしているのであって、きっと時間がなくてせかしているんだろうけど、これは礼儀たたくいってしてくれているのだから、べつにわるいことじゃなくて、これも言語をしゃべるといいういかたのひとつだね。またあるときには

——莫須有先生、でかけるときには言語をしゃべって、だまって町にでかけちゃいけないよ！ちょっと目をはなすとだまってでかけちゃうんだから！

これもまたいいかたのひとつでしょ？おねえさん、吾輩はひと息にこんなにしゃべったけど、なんだか恨みをはらすみたいになっちゃた？だとしたら吾輩がわるいことになるが、あの女のひとはあなたたち旗人のなかでも飛びぬけてすぐれていて、ただし調子にのってしまるのが玉に瑕だけれども、とはいえ吾輩とおなじように自分をあらわすのが好きなんだ」

「莫須有先生、あんたなにかいいたいことがあるなら、そんな女々しくしないでいいのに、なにをビビってるの？」

「ほらしゃべって！」

雁首そろえてあつまってくると耳をそばだてながら、莫須有先生をからかってはやしたてるが、そのなかの第五者がいきなりちかづいてきたかとおもうと、すぐとなりにいるものに耳打ちして——

「莫須有先生っておもしろいわね」

そしてこっちをむくとマジメな顔をしてひとつ咳払いをして——

「やあ」

女たちはだれも相手にしようとしませんが、ひとり莫須有先生だけは首をかしげ——

「吾輩はこのひとと面識がないようだが」

そのひとは顔を赤くして、どうしてよいかわからずもじもじしながら、なんとなくお辞儀をすると——

「莫須有先生はいつやってきたの？元気？」

「もうこのおバカさんったら、いまごろなにをいいたすやら、とっくにであっているっていうのにいまさら挨拶してどうすんの？ほらちゃんとすわって莫須有先生の話聞きましょよ」

おとなりさんはその子をひっぱってすわらせて莫須有先生の話聞きかせようとし、その子は恥ずかしそうにしながらも声を荒げて——

「なんでひっぱるのよ！」

春風もほほえんでいるようであり、そこにわれらが竹ちゃんがやってきて、その手にはおいしそうな果物をもっており、ふたりのおねえさんのほうにむかって——おねえさん、サンザシ、食べる？

そういいながら、おや、なんだか顔が真っ赤になっているのは、ふたりのおねえさんだけに声をかけてほかのおねえさんたちをほったらかしたせいとか、あるいは吾輩という忠実なる召使いにたいして礼を缺いたからだろうか？天にまします神よ、どうか公平なるお裁きを！女たちよ、あなたたちの貞操はまるでうつくしい赤い花みたいで、吾輩はかならずやそれを菩提樹のもとにささげ、もって吾輩の善き果報の証とするつもりで、みなさんどうかかわらわなほしいのだが、どんなに偉大な事業であろうとも因縁がつきまとうものでしょ？その結果については事細かく解説しかねるというだけである。

「竹ちゃん、ひとつちょうだい」

竹ちゃんはひとつわたしたが、その子はどんな遊びをするときでも自分がいちばんになりたがるひとなの

である。

「竹ちゃん、このお金でいくつ買えるの？」

そういったのは莫須有先生とさつき知りあって口をきいたばかりの子で、そう一言たずねてしまえば、世間のことはなんであれお仕舞いになるのである。竹ちゃんはみつつ買えるよという、さらにつけくわえて

「梅ちゃん、あんたも食べる？」

「ひとつちょうだい——わあ、すごく酸っぱいわね」

かたわらの莫須有先生はこの子はじっさい賢者であると賛美していたが、それというのも酸っぱい果物を食べながらもその善良な目は無邪気にかがやいて、ああ、ひとの世における眼耳鼻舌身による五感には靈魂がそなわっており、それがうつくしく表現されれば不思議なものとなるのである。

第十四章 この章では耳がきこえないひとのことを語る

竹ちゃんは水をくんで肩にかついで去っていったが、いったい重い荷物のかついでいるひとは、おしなべて衆にぬきんでて飄逸なおもむきがあつて好もしい。じゃあ莫須有先生はどうかというと、桃李ものいわずといった風情で、ひとり影をしたがえてたたずみ、まるで腑抜けになったみたいである。賢者のみなさんはというと声をそろえて挨拶をして、莫須有先生、ちょっと休んだらどうかしら、ほらすわって、ところが莫須有先生ときたら目をしきりにこすつていて、どうやら目のなかに虫がはいったらしく、どうしようもないという声でいう

「おねえさんたち、ちょっと待ってもらえないかな、というのも吾輩はあなたたちのおしゃべりをきくのが大好きなんだけど、どうも吾輩の目のなかに1匹の虫が飛びこんできたみたいで、ひょっとすると飛びこんできていないのかもしれないけど、ただどうにもこうにも気になってしょうがなく、吾輩としてはガマンできそうもなくて、たといどんな些細なことであろうとも意に介せずにいるというのは容易なことじゃないわけで、吾輩はこのさいあなたたち女のひとから忍耐と犠牲という美德を学びたいとおもっているんだけど、あなたたち女のひとこそは無名の英雄にほかならず、なにしろあらゆるものごとを自我のおもむくままにやっつてのけるのだからね」

「あんたがあたいらのままで目から涙をこぼしたりしたらすごくみっともないわよ」

「そんなことになったら吾輩は女々しいやつとさげすまれるのをまぬかれまいが、じっさいはそうでもないものであって、あいにくあなたたちはなにごととも面とむかってやろうとせず、ひとに本音をみせようとしなから、もっぱら吾輩だけがガキっぽくふるまうことになってしまい、いつでもどこでもすぐに詩をつくりはじめたりして——ねえ、ほら、こうやって目をこすつたらもう大丈夫になって、なにをしゃべったのかを吾輩はすっかり忘れちゃったけど、じつは吾輩はかつて丹薬をねる八卦炉のなかで焼かれたことがあって、邪悪をみぬける火眼金睛という神通力を身につけていて、おまけにそれを画題につけくわえるとするならば、眉に愁いをおびながら翡翠の羽根の掛け布団にはいつて春霞の薄くただようような日をすごすといった風情で¹、それゆえあのサルのおおそれている有形無身の煙をとって吾輩はそれで顔料をつくることのできる」

「莫須有先生、あんたってこんなふうな手紙をかく腕前はあるかしら？ ひとりの女の子がいるとして、あんたはまだその顔もみたことがないんだけど、あんたが手紙をかこうもんなら、その女の子はもう居ても立ってもいられなくなって、お茶もご飯もノドをとおらなくなっちゃうのさ」

「おねえさん、ひとつたずねておきたいのだが、あなたは吾輩にいったいなにを答えさせようとしておるのかな？」

「ほら、ほら、莫須有先生、あのひとの口から出まかせにつきあっちゃダメだよ！」

そういつて茶々をいれてきたのは、莫須有先生とついでさつき面識をもったばかりひとが茶々をいれてきたのである。まえにもそうだったように、ここでもまたどんな遊びをするときでも自分がいちばんになりたがるひとなのである。のこりの面々はみな南からふいてくる風に眉をふかせながらニコニコとほほえんでいるばかり²。ギューギューにつまった人混みのなかにあつてあのひとだけは、莫須有先生はこころのなかで考えるのだが、ぬりすぎだろろうというくらい紅をぬり

1 緑雲 鬢上 金雀飛び、愁眉 斂翠 春烟薄し。香閣 芙蓉に掩れ、画屏 山幾重なり。窸寒 天欲曙、猶お心苜を同じうするを結ぶ。啼き粉れ 羅衣を汚し、郎に問う 何れの日にか帰らん（緑雲鬢上飛金雀、愁眉斂翠春烟薄。香閣掩芙蓉、画屏山幾重。窸寒天欲曙、猶結同心苜。啼粉汚羅衣、問郎何日帰）牛嶠「菩薩蠻 其六」

2 凱風は南自りして 彼の棘の心を吹く（凱風自南 吹彼棘心）『詩経』邶風「凱風」

たくったあのひとだけは、ひとりだけずっと一言もしゃべろうとしないのである。

「しかしながら吾輩としては吾輩の抱負をのべねばならぬのだが、ふむ、それが言葉にならぬ抱負であることを恥じるばかりであって——おねえさん、ひとつおたずねしたいのだけど、吾輩があの一とにであう以前も、依然として世界は世界であって、世界というのは不可思議なもので、空は無であり、有も無であるというけれども、人間の墓だったら丘の草によって想像がつくのはちがって、こういう境地が、こっちはあるのか？ あっちはあるのか？ いったい吾輩はどうして手紙をかこうなんていう気になれる？ とはいえ人生というものは水に浮いて流れてゆくようなものだけれども、天と地とは幻ではないからには、あっちとこっちとがバツパリであったならば、むかしの吾輩ならなんにもいえなかったにちがいないんだけど、そんなふうな手紙をかく腕前があるかといわれればあるかもしれない、おっしゃるとおり、まことに恥ずかしい日々をすごしてきたとはいえ、いまの吾輩であれば恋愛のこともわきまえているから、たしかに容易ではないけれども、というも吾輩はここぞというときに乾坤一擲といったふうに勝負をかける性格であるからして、ああ、なんともはや悲しいことに、人生におけるわらうべくかつうやまうべきような場面にでくわしたならば、もっぱら自分のことばかりを表現しようとするのはダメであって、むしろ場面の裏にひっこんで恥ずかしがるということを実感すべきであり、そういうふうに自分を鍛えてみるならば、ひょっとするとこの虚しき無可有の郷にあっても天国をでっちあげることができるかもしれず³、ただしそういった境地に達することはあなたたち婦女子にはおそらくできない相談であって、それはかならず一丁前の男でなければならず、そもそも天国というものは、けっしてみずからえがきだす楽園であってはならぬのであるからして、もしそんなふうを考えたりしようものなら、そんなものは市場のコソ泥のようなもので、どんなにガンバって見たところでガンバればガンバるほどわるくなり、まったくみぢやいられないというふうに、たとい地獄におちようともおそれぬもの、わしが地獄におちなければだれが地獄におちるといふのだとうそぶけるもの⁴、そういうものであってはじめて深思熟慮できるのであって、なにかにつけて躊躇しながらしゃべるものだから、たちどころに意にかなうというふうにはゆかぬけれども、けっきょくそのものの天賦の才はひとよりぬきんでて高いといわざるをえないのだよ」

ここまで語ってきたところで、それに応ずるように声がして

「莫須有先生のいつてくれることはここにズシンと響いてくるけど、いったいこの人生というものにはどういう意味があるのかしら？ まるで虫ケラみたいに追いまくられ、くる日もくる日も当たり散らされて、たとい虫ケラであろうともどうしてこんなふうになげられなきやなんないの？ もう考えれば考えるほどわらっちゃうし、わらっているうちに腹もたってくるわ！ ヘン！」

ヘンというのは腹がたつたときの鼻の音である。

「いったい吾輩のいうところのなにが賢者を啓発したのであろうか？ まえに一度だけおふたりがどうでもよいことでケンカしているのをみかけたことがあるんだけど、ひょっとすると——あなたは敗軍の将なのではあるまいか？」

「そう、あたい、たかが鬢つけ油くらいのことでね——莫須有先生、あんたにひと肌ぬいでほしいんだけど、あたいを助けるとおもって仲裁にはいつてくれないかしら」

「いやいや、あなたたち旗人はどんなに困窮していても礼儀をまもろうとするから⁵、まったく吾輩はうんざりさせられるわけで——たしかにケンカの相手はわるいひとで、いまだに腹の虫がおさまらないんだけど、さいわいこの場にはいないからよいようなものの、さもなくば吾輩はきつと絶交しているよ！ とはいえ済んだことはもう済んだことにして、いつまでも気にしないほうがよく、あなたのいつた言葉のほうが、むしろ吾輩を啓発してくれたのだが、あらゆることは見方次第なのであって、古今をとおしておびただしい詩人たちがそのつどの inspiration⁶ によって自然とか原

3 無可有之郷は「指空無所有的地方。莊子逍遙遊、今子有大樹、患其無用、何不樹之於無可有之郷。又列禦寇、彼至人者、歸精神乎无始、而甘冥乎无可有之郷。无、同無。後多用無可有之郷指虚幻的境界或夢境」(『辞源』第三版)

4 崔郎中問う、大善知識も還た地獄に入るや。師云く、老僧は末上に入る。崔云く、既にはれ大善知識なるに、什麼の為にか地獄に入る。師云く、老僧若し入らずんば、争でか郎中に見うを得ん(崔郎中問、大善知識還入地獄也無。師云、老僧末上入。崔云、既は大善知識、為什麼入地獄。師云、老僧若不入、争得見郎中)『趙州録』

5 子貢曰く、貧にして諂うこと無く、富みて驕ること無くんば何如。子曰く、可なり。未だ貧にして楽しみ、富みて礼を好む者には若かざるなり(子貢曰、貧而無諂、富而無驕、何如。子曰、可也。未若貧而樂、富而好礼者也)『論語』学而

6 原文の「煙土披里純」は英語の「inspiration」

始とかいったものへと趨向したわけだが、とりわけ愛情についてそうだったりするのだが、ほら、あの木のうえの鳥、あのチョウチョ、なんともはや無邪気に飛びまわっているけど、あれこそが自由ってもんじゃなからうか？ ところが人間ときたら万物の霊長であるからして、やれ「無邪気」だの、やれ「自由」だの、しょせん生まれてきて意識をもつことによる産物にすぎぬのであって、そしてそれをわれわれの理想とみなしているけれども、生きとし生けるものはだれしもそういう本能はもっているものであって、ちょうどあのチョウチョだってそうなのだが、あいつはおのれのうちつくしい飛びすがたをみずから鑑賞したりするだろうか？ 吾輩は濠水のほとりで魚の楽しみをわかっているのである⁷。いろいろ面倒なことはあるけれども、それはどうにも仕方のないことであって、じっさい文化とはそういうことで、その原因はというと簡単でないこともなくて、男だったら前進あるのみ、改革をもとめ、幸福をもとめ、とはいえ吾輩はというと人知れぬうちに一切のしがらみを我とわが身のうえにみずからまとわりつけてしまうもので、その錯綜ぶるときたら相当なものであって、そこにおいて涅槃を身につけるべく修行することもでき、それは生存に適し、また変化に応じていることはハッキリしており、いつであろうとも自然の法則にかなっていて、そのことを本日ここであなたがたといっしょに語りあう機会をもつことができたというのは、まことにもって光榮のいたりというよりなく、まさになにをかいわんやというよりなく」

「莫須有先生、もういっちゃうのかい？ もうちょっといてくれないの？」

「いかにも、吾輩はもう帰ろうとおもっていて、というの帰ってやらねばならぬことがあるわけで、ひとにはだれしも執着していることがあって、どうしても世俗から脱けきることはできぬらしい」

「ちょっと一言だけいわせてもらってもいいかしら？」

「またもや遊びをするときに自分がいちばんになりたがるひとである。」

「どうぞ！」

みんなそろって催促する。

「どうぞ！ いってごらん！ はやくいわないと莫須有先生が帰っちゃうわよ！」

「一言じゃなくて二言でもいいかしら？」

莫須有先生はうんざりしてきたので、袖をはらって起ちあがりながら――

「あなたはただ時間をムダにするばかりだ！ 吾輩

だつら千載一遇の好機にであらたびに道理を悟るというのに！」

そのひとは襟を正すと、いかにも調子をあわせるような口調で――

「莫須有先生、そうとも、あんたはあたいらに天国というものがあるっていったけど、そうとも、もしあんたがそこには行ってゆけるとしたら、それは当然のこととしてあんたの魂が高貴だからってということになるわけで、あたいら婦女子はてんでお呼びでないってということになるんだろうけど、でもねえ、莫須有先生、あたいは真剣にいうけど、あたいは――あたいは――みんなの目のまえでどういえばいいっていうの？ あたいはその魂に羨望をおぼえるわ！ あたいはその魂に尊敬もおぼえるわ！ でも、あたいは自分でもわかっていて、天国にはあたいの居場所はなくて、あたいなんかには手がとどきこないんだけど、どうしてあたいら女はこんなかわいいような目にあわなきゃなんないの？ どうしてこんなにちっぽけな存在であるわけ？ もっと向上しようとおもっちゃいけないの？」

その言葉がおわたかとおもうとその場の女たちはいっせいにすすり泣きををはじめ、いったん口からでてしまった言葉はとりかえしがつかず⁸、もはや手のほどこしようもなく、莫須有先生はきつと冗談だろうとおもっていたのだが、それにしては我を忘れているようであり、そこでつい不覚にもおもわず口走ってしまい

「おねえさん、ひとつおたずねしたいのだが、もしほんとうに天上というものがあるならば、それは吾輩が

7 莊子、恵子と濠梁の上に遊ぶ。莊子曰く、儻魚出で遊ぶこと従容たり。是れ魚楽しむなり。恵子曰く、子は魚に非ず、安んぞ魚の楽しむを知らんや。莊子曰く、子は我に非ず、安んぞ我が魚の楽しむを知らざるを知らんや。恵子曰く、我は子に非ざれば、固より子を知らず。子は固より魚に非ざれば、子の魚の楽しむを知らざること全し。莊子曰く、請う其の本に循わん。子曰く、女、安んぞ魚の楽しむを知らんや、と。云う者は既已に吾が之を知るを知りて我に問えり。我、之を濠上に知るなり（莊子与恵子遊於濠梁之上。莊子曰、儻魚出遊従容。是魚樂也。恵子曰、子非魚、安知魚之樂。莊子曰、子非我、安知我不知魚之樂。恵子曰、我非子、固不知子矣。子固非魚也、子之不知魚之樂全矣。莊子曰、請循其本。子曰女安知魚樂。云者既已知吾知之而問我。我知之濠上也）『莊子』秋水篇

8 棘子成曰く、君子は質のみ。何ぞ文を以て為さん。子貢曰く、惜しいかな、夫子の君子を説くや。駟も舌に及ばず。文は猶お質のごとく、質は猶お文のごとし。虎豹の鞞は猶お犬羊の鞞のごとし（棘子成曰、君子質而已矣。何以文為矣。子貢曰、惜乎夫子之説君子也。駟不及舌。文 猶質也、質猶文也。虎豹之鞞、猶犬羊之鞞）『論語』顔淵

みずから知っているものであって、それは上帝が教えてくれたものじゃなくて、だいたい吾輩はべつに上帝と知りありなわけでもないし、ええっと——ええっと——吾輩はなんといえよのかな？ 吾輩はウソをつくのはイヤだし、それはある女の子が吾輩に教えてくれたのだよ！ その子は吾輩を済度してくれたのです。ここで感激という2文字をいうことができないのは、それは人生よりも尊重すべきことだからであって、というの愛情においてその子はおのれの身を忘れてはて、その志を高くいだき、みずからの人生を追いもとめてゆかねばならなかったのです。吾輩は幽霊であり、吾輩は天にのぼった。どうして吾輩はこんなにも悲しいのだろう。憧れのひとがいうには、一切衆生を済度するというの、衆生を成仏させるというの、自己を成仏させるということで、このことはうまく語ることはできないわけで、いい加減に語ってしまったりすれば吾輩は地獄におちて刑罰をくらうだけじゃすまないことになる。吾輩は世々にわたって人間界に流謫せられ、そこで犬馬の労をとることを願っており、それでなんの不平もないのです

サンザシを食べてその酸っぱさにビックリしたひとがなだめていうには

「まあまあ、みんなもうそんなにさわぐのはよみましょうよ、あたいなんだかつらくって、莫須有先生、これで……これで……」

そのとなりにいるひとはこらえきれずに

「莫須有先生、その子にお礼をいってあげてよ！ その子はそのハンカチであんたの涙をふきなさいといってくれてるのよ！」

「そんなことだれがいった？ だれがいったの？ あたいのこのハンカチをだれにわたすっていうの？」

「もう、照れるんじゃないよ！」

「あんたたちふたりはどうしちゃったっていうの、どうでもいいことでそんなにさわぎたてたりして！」

莫須有先生はどうやらおもうところがあるらしく、なんにも気づかぬふりをして、片手を巾着袋につっこんでごそごそやったかとおもうと、なにか字がかかれた紙切れをひっぱりだして、それはふだんから親しくしているものだったらいきなり金持ちになって質種を請けだそうとでもしていて、もう五日をすぎちゃったかどうかをしらべているというふうだとでもおもうかもしれない、そんなに親しくないひとならあるいは莫須有先生の家主の奥さんから頼まれて油や塩などの買ってくるものがメモしてあるお茶っ葉をつつむための紙切れを莫須有先生はみているのだとでもおもうかし

れない。そのどっちでもないということはだれにもわからなくて、莫須有先生はあたかも文壇に地位をさだむべき文言でもしたためてあるかのように紙切れをささげもち⁹、まわりのものがビックリしていると、おもむろに報告しはじめて——

「みなさん、吾輩はようやく詩をつくりましたよ！」

「みる！」

「みる！」

「みるけどいっぺんにはダメよ！」

莫須有先生はしょうがないという顔をしてうたつてみせるに、この子はあの子じゃありません、髪に油をぬっているし¹⁰。

たったひとりだけ近くに寄ってこようとせず、はなれたところで膝をかかえていうに

「ねえ、ねえ、あたいはやっぱり莫須有先生があたしたちによんできかせてくれるほうがいいとおもうわ！」

莫須有先生はゆっくりと言葉を噛みしめてみるに、この「ねえ」というのはきっと Hello! にあたるにちがないというのも先生がつかう鞭でピシャリとやられたみたいにみんなはビックリして顔をあげて

「そう、そう、あんたがあたいらによんできかせてちょうだいな」

「でも吾輩がうまくよんできかせられなかったら文句をいうだろ！」

「いいの、いいの、平気だから、よんでちょうだい」

莫須有先生はしょうがなくよみはじめる

ほらみてごらん

草のうえを風がふいてゆく

風はふいちゃいけない

花はさいちゃいけない

どっちもうつくしくないよね？

吾輩がたんに悲しみをこらえられぬだけ

シャコはどこで鳴いているの？

鳴いちゃいけない

ハッカチョウがどこかで跳ねている

跳ねちゃいけない

鳥なんてかわいくないよね？

吾輩をわかってくれる鳥ならかわいいけど

吾輩がたんにだ悲しみをこらえられぬだけ

ツツジがひらくのはうつくしい

9 原文「奠定文壇」は不詳。

10 「この鴨頭はかの頭にあらず 頭上いづくんぞ桂花油を討めん」松枝茂夫訳『紅樓夢』第六十二回

青山が深いのはおもむきがある
 吾輩がたんに悲しみをこらえられぬだけ
 吾輩はあなたの名前をよんでみる
 吾輩はおのれの山彦によびかける
 吾輩は石のうゑに腰をおろして――

吾輩は石のうゑに腰をおろして、ここまでよんだところでよみおわたのかどうかはわからぬまま、莫須有先生はどういうわけかうなだれてよまなくなってしまう。

「バカなおねえさん、どうしてだまっちゃうの？」

「あんたこそどうしてだまっちゃうの！」

「この女の子は斬りかえしがうまいわね」

いつもどおり莫須有先生はみずから沈黙をやぶって――

「あなたたちがホメてくれないということは、きっとこの詩はうまくできていないということだね」

「そんなにいっぱい草木虫魚の名前をあげられてもあたいら北京のものにはさっぱりわからないし、たとえばツツジがひらくのはうつくしいっていわれても、ツツジがひらくのはうつくしいってどういう意味なの？」

「もうおねえさんったら、あんたって詩のことがまるでわかっていないんだから、ここで意味をとらえればいいのよ。莫須有先生、おこっちゃダメよ」

莫須有先生はべつにおこってなどおらず、かれは空想の馬をはしらせて地上からほろんでしまったツツジの山へと駆けてゆくのであり、道ゆくひとびとはみな意気消沈しているかのようなのである¹¹。いきなり顔をあげて、命ずるような口調で

「あなたたちはみんな帰って、もうこんな時間だし、さっさと帰らないとお姑さんに叱られるよ」

すると帰ろう帰ろうということになり、靴をはくやら、帽子をかぶるやら、肩をぶつけ、踵をこすり、おのおの荷物をつぎあげる。その先頭にいるものは腰をのばして伸びをすると、かたわらにいるものの肩にもたれかかり、だるそうな顔でわらいながら

「オンブしてちょうだいね」

「ふざけないでよ、できっこないわ」

莫須有先生はこの田舎の女の子の口からでる言葉がそのまま詩の文句になりそうなのにビックリし、これならきっと美人をちゃんと美人としてうたえるだろう。

「莫須有先生、あたいら帰っちゃうから、じゃあまたね」

莫須有先生はながいあいだ留守にしていた住まいのほうに歌を口ずさみながらゆっくりとした足どりでむかい、空っぽの部屋のなかにはいったとたんなかなか雰囲気があるじゃないかとおもい、だれか声をかけてくれないかと待ってみたが、どういいうわけか物音ひとつせず、ああ、ひとの一生というものは客として招待されるようであってはならず、夫が帰ってきた家ではうれしげに夫婦むつまじくしているというのに、吾輩に声をかけてくれるひとはおらず¹²、大鳥ははるか四方の海までも羽ばたいてゆくが、途中で帰るところもなくなってしまい¹³、ちょっとプツとふきだしたのだが、吾輩のこのプツについてはだれひとり知っているものはおらず、じっだいだれにも知らせられるものじゃなくて、これは演劇の仕草をマネしたもので、それも中国においてダントツに有名な少女の役柄のそれをマネしたもので、

――プツ！ あたいに恥をかかせるんじゃないよ

吾輩がせっかく学んだ『四書五経』はまったくどこにいつてしまったんだろう。吾輩の家主の奥さんはどこにいつてしまったんだろう？ おそらく吾輩が留守なのをよいことによその家に遊びにいったにちがいない！ あのひとはいつだって吾輩が何日も町にいつてままだであることを願っているのだ！ そうやって姉妹たちとお茶をだらだらと飲みつづけたあとにご飯をつくるのをサボろうとするのだ！ そうやって吾輩のこわれやすい評判をすっかりダメにしているのだ！ うちには四十二歳にもなってまだ嫁にゆかぬままだれかがもらってくれるのを待ちつづけている二番目の妹がいるのだが、このふたりはどっちも似たり寄ったりで、おそろしく口が達者なのだが、――おねえちゃん、いつも心配ばかりかけてゴメンなさい！

二番目の妹はどうやら歯が痛いらしい。

――おねえちゃん、いつもほんとうにお疲れさま！

ほんのちょっとした用事のたびにそういうのである。

――二番目の妹、また晩に遊びにおいで！

まるで客をみおくるようである。

――二番目の妹、また明日遊びにおいで！

11 清明の時節 雨紛紛 路上の行人 魂を断たんと欲す (清明時節雨紛紛 路上行人欲断魂) 杜牧「清明」

12 門に入りて各自おの媚ぶ 誰か肯えて相為に言わん (入門各自媚、誰肯相為言)「飲馬長城窟行」

13 黄鶴は四海に遊ぶも 中路にして将安にか帰らん (黄鶴遊四海 中路将安帰) 原籍「詠懐」其十四

まるで夜中に客をみおくるようである。翌朝になって家主の奥さんは昨晚はさわぎすぎて莫須有先生に迷惑をかけたと気づく。それで莫須有先生にえらく迷惑をかけてしまったんじゃないかと心配になって、いつもタイミングをみはからって謝りにやってくるのである。ところが自分もひどく疲れているし、それに寝不足なもんだから、テーブルのうえには食べたままあらっていない料理の皿をのこしたままで、けっきょく吾輩がかたづけるということになるのだ！ わざわざよその家におしかけて夜中までどうでもよいことをおしゃべりして、あなたみたいにヒマなひとめずらしいよ、まったくおしゃべりなんだから！ ふと気づくと、莫須有先生の部屋のカーテンのところから朝日をあびた顔がのぞきこんでおり、はたして莫須有先生がおこっているのかおこっていないのかということが天下の一大事でもあるかような感じで、ようやくのことで口をひらくと――

「莫須有先生、ねえ、だってしょうがないじゃない、だってさ、昨日の晩だって夜中までずるずるとあたしも相手をさせられちゃってさ、きっと莫須有先生が眠るのをジャマしちゃったにちがいないとおもったんだけど、だって遊びにこられたら相手をしないわけにもゆかないじゃない？ あたしだってウンザリしているんだけどさ おや、あたしたちの花が今年はずいぶんキレイにさいちゃって、ひょっとして昨日の晩のうちに莫須有先生が水をやってくれたんじゃないの？」

こっちはまだ顔もあらってもいないというのに満面の笑みをうかべて今年の桃の花はほんとうにキレイにさいてといったかとおもうと、つかつかと2歩ばかりすすんで指で花をつまんでいじりはじめる。

「みてちょうだい、ほんとうにキレイだわ」

莫須有先生はまだ顔もあらっていなかったが、たしかに今日の桃の花はすばらしく赤くさいているので、しょうがなく顔をくもらせながらも文句をいいたいところをグッとこらえてこたえるしかなくて――

「キレイだね」

「莫須有先生、あたしのあの従姉妹だけどさ、たしかに対面をとりつくるのはヘタだけど、そのかわり頭はかしこくて、どんなことでも上手にやってのけるし、針仕事もうまくて、なかなかの娘っていうか、めったにいないような娘で、実家のことについても文句ひとついわないし、あんな歳になるまで文句ひとついわずに、ほんとうに文句ひとついわずに――莫須有先生、あんたは気づいていないとおもうけど、こんな

ふうというところあたりの連中はわらうんだよ！ なんてたって従姉妹の母親がわるいとおもうんだけど、というのは仲人がやってきても母親がそのつど気にいらないとってことわってしまうもんで、そのうち仲人はもうだれもこなくなってしまうんだけど、いったい母親が死んでしまったらだれが娘のことを面倒みるとおもっているんだろうね！」

ここまでいって急に口をつぐんだのは、莫須有先生が白い目でみていることに気づいたからである。ようやくふたりとも鎧兜をぬぐことにしたようである。莫須有先生は顔をあらって口をすすぎながら腹だちをグッとこらえて、ぼそぼそぼそ。壁のむこうでは聴き耳をたてていて、そこは共用の台所である。

――なんていつてるの？ ちっともきこえないじゃない！ もういいわ！

いきなり頭をさげて一心不乱にニラの始末をしはじめる。こういうふうなことは、それはもうしょっちゅうで、おもしろいかといえばおもしろくないこともないが、なにしろ枚挙にいとまもないことだし、生きていればいろんなことがあるから生まれ故郷を捨てることもないよね？¹⁴

公平にいつて、莫須有先生がこちらにやってきてこのかた、莫須有先生の家主の奥さんはあまり家からでないように気をつけていて、いちいち口にだしこそしないけれども、莫須有先生のハンコのことをとても大切だとおもっていて、そんじょそこらにはない、めっほう価値のあるもので、それなのに無造作にほっぽりだしてある！ もしもガキどもにもっていかれたらどうするの？ というわけで、一日の二十四時間のうち、もし莫須有先生がなんだかんだで外出し、彼女もまたよんどころなく家をはなれざるをえないようなとき、彼女はその兄に留守番をたのむのであるが、その兄はというと耳のきこえないおじいさんなのであって、そのかわり目はたいへんよくて、莫須有先生のこころのなかまでもすっかりお見通しであって、さびしいんだな、うれしいんだな、すっかり腹をたてているな、一時的にすねているだけだな、これはいつてもよい、これはいつちやいけな、ひとの機嫌をそこなうことはなく、ありとあらゆる形而下のものであれ

14 柳下恵、士師と為り、三たび黜けらる。人曰く、子未だ以て去る可からざるか。曰く、道を直くして人に事うれば、焉くに往くとして三たび黜けられざらん。道を枉げて人に事うれば、何ぞ必ずしも父母の邦を去らん（柳下恵為士師、三黜。人曰、子未可以去乎。曰、直道而事人、焉往而不三黜。枉道而事人、何必去父母之邦）『論語』微子

ば、どんなに悪人であろうとも、どんなに隠そうとしてもバレてしまうのだが、悪人ならざるあなたが盗みにやってくるはずはないから、吾輩はおのれの耳をふさいで鐘を盗むようなマネはせずすむのである¹⁵。そうこうするうちに莫須有先生が鼻歌をうたいながら帰ってきてみれば、ちょうどそのひとが留守番をしており、するといきなりさびしい気持ちがわいてきて、さびしさとともに不満もわいてきて、不満がつのとともに大声でさげんでしまって、

「耳のきこえないおじいさん、この家の主人であるあなたの妹の奥さんはどこにいったの？」

さびしい気持ちがよいよつとつてきて、さびしさをつのらせている自分のことがだんだんおもしろくなってきて――

「吾輩はまたあなたとおしゃべりしちゃうよ！」

みずから石をはこんできて腰かける。

「どんな用事があってでかけたのかあなたにいましたか？」

どんどん自分のことがおもしろくなってきて、わらうこみあげてきて、吾輩はまたあなたとおしゃべりしちゃうよ！ 莫須有先生はこのひととおしゃべりするたびに、いつもおもしろくなってきて、

――吾輩はまたあなたとおしゃべりしちゃうよ！

まわりに聴いているものがあればみんなわらうところである。莫須有先生はこういった連中といっしょにいる習慣がまだまだ身につけていないのである。

そこで莫須有先生はもう樹齢三十年にもなろうかというナツメの木のしたにしゃがみこんで地べたになにかかきはじめたのだが、なにか字をかいているのか、それとも花をかいているのか、あるいは十文字に線をひいているのか、地べたを牢屋とみなして閉じこめて遊んでいるのか、地べたを地球とみなしてそこに一と大とをかいて天だといっているのか、なにをしているのかわからぬが、いずれにせよひどく子どもっぽくて、まるでどこかの身寄りのない子どもがひとり遊び

をしながら、おかあさんのお墓のまえにうずくまって、ぼちぼち日も暮れようというのにもものおもいにしずんでいるかのようで、みるものに言葉をうしなわせる。いつのまにか耳のきこえないおじいさんが近づいてきており、莫須有先生はどういうわけか親愛の情がわいてきて、なんだかとても申し訳ないような気持ちになり、どうしていつも邪慳にあつかってしまったのだろう、それに気のせいかもしれぬが今日のおじいさんは愁いをおびた面持ちをしており、なんだか莫須有先生とおしゃべりをしたがつているようなのである。

第十五章 莫須有先生伝は焼き捨ててよし

耳のきこえないおじいさんは莫須有先生にむかってなにか一声発したかとおもうとそのまま嗚咽しはじめ、莫須有先生はすぐにピンときたのだが、この世にあるかぎり生老病死はまぬかれぬといったことにちがいはなく、吾輩としては気をたしかにもって冷静さをたもたねばならず、いったい吾輩はおのれの人生にたいしてどのような態度をとるべきなのであるかとおもっていたところに、おばあさんのワアッと泣きさけぶ声が耳に飛びこんできて、それはもうゾッとするような声で、ひとのあとをついてどこまでも追いかけて悲しい歌をうたいかけてくるような声であって、じっさい仔細に吟味してみればおそろしく刺激的な作用をもたらすべきものではあったが、吾輩はまったく動揺しておらず、そう、オギャアと生まれてこのかた吾輩はずっとそうなのであって、生まれてからずっと死にたいして好奇心をいだきつづけており、あらゆるものごとなかで吾輩の厭世観をゆるがすことのもっともすくないのは死というものであって、というのもそれは吾輩がもっとも想像することが好きなことがらなのであって、とはいえ思索にふけるというふうではなく、馬ののって花をながめるといったふうであり、だから棺桶をみるのは好きではなく、さりとして吾輩の友人のように棺桶をみるだけでビビってしまうというほどでもなく、なぜならそれは吾輩にはただのみつともない容れものにしかがみえないからであって、どうやら吾輩にとっての死とはもっぱら想像すべきものにすぎぬようであり、たんなる経験の一筆書きであって――どうなのだろう、そうでもないのかな？ 吾輩はかつてひとりの少女の死にころをうごかさされたことがあり、いったいその子の人生とは家のまえをとおりすぎるばかりでなかにはいらなかったようなものだというべきなのかもしれぬが、とはいえどうして不可思議な

15 范氏の亡ぶや、百姓鍾を得る者有り、負いて走らんと欲すれば、則ち鍾大にして負う可からず。椎を以て之を毀たんとすれば、鍾況然として音有り、人の之を聞きて己より奪わんことを恐れ、遽かに其の耳を拵う。人の之を聞くを悪むは可なり、己自ら之を聞くを悪むは悖れり。人主と為りて其の過ちを聞くを悪むは、猶お此のごときに非ずや。人の其の過ちを聞くを悪むは尚猶お可なり（范氏之亡也、百姓有得鍾者、欲負而走、則鍾大不可負。以椎毀之、鍾況然有音、恐人聞之而奪己也、遽拵其耳。悪人聞之可也、悪己自聞之悖矣。為人主而悪聞其過、非猶此也。悪人聞其過尚猶可）『呂氏春秋』不苟論・自知

空白だなどといってよかろうか！ しかしその子のからだには死に装束がふんわりとかけられており、なにもかも手つかずになっていて、とはいえこの花園はもとより各人固有のものであり¹、まさに千載一遇なのであって、どうして不思議にも目にみえるものが際限なくひろがっている夜なのだなどといってよかろうか！ 莫須有先生はふだんからきつとこのようにして千遍も万遍もみずから死んでいたのであって、ふと顔をふりあおいでみれば人生はまたもや灯りが燃え尽きようとしているではないか！ その眼の光は、まさしくしづかなること処女のごとくうごきまると脱兎のごとくである²。なんとまあ、この境地にいたるといのは人生において誇りとすべきことであって、たとい目がみえぬものであろうとも天地の間であってなんの障碍になるというのであろうか？ それはまるで傘をさしているようなものであり、そもそも傘はいつだって吾輩にとっては想像をかきたててくれるものであり、それは吾輩にとってすばらしいものなのであって、絶世の美女がひとり雲霧のなかをゆくとき、うつくしく化粧することはまさに粉白黛緑というべく、うすぎぬの裾はゆるやかに塵をまきあげ、一本の傘のもとに天下をおさめつくし、天下にふりしきる雨、その雨のなかの傘はといえば朝の雲のように濃くかつ淡いけれども、それらの一切はすべて一本の傘の造化の妙にかかるものであって——ひとびとを扇動する神通力をもった道士であれ、だらだらと人力車をひっぱるだけの北京の車夫であれ、いったい吾輩はどうして忘れることができぬのだろう？ おそらく莫須有先生は夢のなかとはいえ死体の山を勝手にでっちあげるようなことごとくできぬのであって、それはなぜかというと小心者だからであり、そこへゆくと造物主はすこぶる太っ腹で、ひとりの聖者を生みだしておいて十字架に釘打ちされるのを目のあたりにさせたりして、莫須有先生はとある大詩人がひとりの女王の酔生夢死のさまをえがいたものを読んだことがある。たしかに自分はだれかに銃で撃たれて死んだという夢をみたことがあり、醒めてみればまさに自分はどうもイラだっているという証拠なのだと思いついて、胸がドキドキして、それはもう悪夢であるにちがいがなかった。

「莫——莫——莫須有先生、あたし——あたしの姪っ子が今日の朝はやくに死んじゃった！」

「ど——どういふこと？」

「昨日の夜に具合がわるくなって、まだ一日もたっていないというのに死んでしまった！」

莫須有先生はいましがた楽屋から飛びでてきたばか

りというふうには、ぜいぜいとあえぎながら、すぐさま何度もたてつづけにトンボ返りをしたが、ところがそういう吾輩にこたえて太鼓が打ち鳴らされることはまったくなく、かとおもうと舞台のしたにいる大学教授たちはやんやとはやしたて、この大根役者めぐずぐずと時間をムダにするんじゃない、われわれがみたいのは藝術家の揚小楼なんだ！³ 聴衆よ⁴、この世のなかの出来事はまことに不可解であって、この一瞬はあの一瞬ではなく、たった一言きいただけで発狂するかもしれない。莫須有先生はあわてて忙中閑ありをきめこみ、その思索はいうにいわれぬ境地にまでいたり、生死の岸にまでたどりついたものの、これっぽっちも落ち着くことはなく、こうなったら文字を符号にするしかなく、あの子？ あの子？ あの子？ 吾輩とあの子とは一面識の縁があるのだが、その子が死んじゃった？ 一体全体どういう話なのか、吾輩はもちろん明日になったらどんな花がさくかという造化のことわりを知るすべをもたないけれども、とはいっても吾輩はじっさい昨日のあのかわいらしい子の一生がどうであったかをかくことはできないわけで、あんなにかわいらしい子なのに、吾輩がいたいのは悔やんでも悔やみきれぬということ——いったいどうして、ひょっとして耳のきこえないおじいさんが吾輩にしゃべりかけたのをきいたからなの？ 言葉や文字はなにをあらわしているの？ この世における出来事にはすべて原因があるはずだ！ はは、吾輩はわかった！ 吾輩は悟った！ どういうことだ！ どういうことだ！ ジャマしないでといたらジャマしないで！ 吾輩にはかならずや参禅への道がひらけている！ 吾輩はこうやって目をとじて……

「莫須有先生、あの子はものすごくひとに好かれる子だったけど、ひとに好かれる子っていうのは早死にするものなのよ！」

「吾輩はもうあなたたちの話をきかないといたらもう絶対にきかないし、耳のきこえないおじいさんも泣かないでっていたら泣かないで、いったい吾輩の世界のなにが増えてなにが減ったというの？ あなたた

1 これは勘でいうのだが、周作人の自編文集『自己的園地』のことが念頭にありはしないだろうか。

2 是の故に始めは処女の如く、敵戸を開き、後には脱兎の如く、敵拒ぐに及ばず（是故始如処女、敵人開戸、後如脱兎、敵不及拒）『孫子』九地

3 揚小楼は京劇俳優。

4 看官は「話本和旧小説中対聴衆の称呼、是説書人的口吻」（『辞源』第三版）

ちの名もない女の子がこの世にいるまえに吾輩は吾輩の世界を生きていたし、あなたたちの名もない女の子がこの世にいなかったあとも吾輩は吾輩の世界を生きているわけで——ちょっと考えてみるから待つてほしいんだけど——そうだ、世界の大きさは個人の記憶の大きさといっしょなのであって、あわれな莫須有先生がこの世からいなくなったとしてもこの世には穴があくこともなければ物がなくなることもない。だったらなにが「吾輩の」ものなの？ 吾輩がこうして文字をかいている吾輩の筆こそが吾輩のものである！ これは琉璃廠で買って来たものである！ 吾輩が死んだらあの世にもってゆくのである！ とある古人の夢のなかで吾輩はこれをなくしてしまった！ 張翰はふるさと呉松江の雨をすすめようと、それを屏風にえがいて鮑昭におくった⁵。ところがこの解脱した吾輩のからだは吾輩といっしょにうごくので、おもわず彼岸のものが涙でこちらをふりかえろうとも、風蕭蕭として易水寒し⁶、どうしようもなく泣き別れするよりなく、ふたたび知りあうことがあれば、そのときこそ吾輩はようやくもつとも親愛なる吾輩となり、シカをさしてウマというように、敵と味方とをとりちがえ、形と影とがたがいにつれそって、俗ないいかたをすれば「莫須有先生のことは棺を蓋いて論定まるのである」ということになるのである。ひとはそうなることによって死んだとみなされるのである。今日こそ今日こそ、彼女、彼女、彼女、うつくしい娘さん、まるで吾輩のえがいた一幅の絵のように、それは吾輩の会心の作なのだが、それは吾輩を歓喜にむせばせたり、吾輩を寂寞にまみれさせたり、吾輩に自己を認識させたり、吾輩に宇宙を思索させたり、本来無一物、ただ顔料をうまく按配するだけで、時間とともに風化するのとは当然のことだとしても、それは顔料の変化ということではかなく、一切、一切、これは一切なのであって、もしあなたたちがこの言葉の確実であることを感じられぬとしたら、それはあなたたちが切実に感じとることができぬからであり、それはあなたたちの暮らしぶりが浅はかだということなのだ！ はは、これから吾輩は虚空に一輪のまぼろしの花をえがくが⁷、そうすれば吾輩の暮らしはきっと意義あるものになり、千輪万輪の花があるなかでこの一輪だけは不思議であって、詩にうたうようにトビは飛んで天にいたり、魚はふかい淵で跳びはねるけれども⁸、ほら、飛んできた飛んできた飛んできた、吾輩のうちの玄関のまえにも飛んできたが、はは、なんとまあメスのオウムじゃないか、オウムちゃん、女の子はいまはもういな

いんだよ、ねえ、ねえ、ああ、ああ、どうしようもなく吾輩のころには迷いがこぼれおち⁹、こぼれおち、花のついた枝にこぼれおちる吾輩の悔やむころよ……」

ここにおいて莫須有先生はふたつの眼をみひらいて、そこから金色の光をはなち、さりとて白昼に幻をみるでもなく、まさかとはおもうが吾輩はみずから催眠から覚醒したのであろうか？ それとも夢をみているのだろうか？ どんな寝言をしゃべったのだろうか？

だれかにそれをきかれたのだろうか？ あとでだれかが吾輩が恋愛のなかから生死へと解脱してきたといたりして！ 吾輩の家主の奥さんはまだ帰ってきておらず、耳のきこえないおじいさんはここにいてまだ悲しみにくれており——耳のきこえないおじいさん、吾輩はなにかいっていたかい？ やれやれ吾輩ときたらまたあなたとしゃべろうとしているよ！ ここにおいて莫須有先生はひどくビックリして、今日の吾輩はまるっきり昨日の吾輩ではなく、曇りのない鏡がみずからその映像をあらわしてくることはないけれども、十年ものあいだ悟ることができなかった道がにわかには豁然としてひらけてきたら、いったい吾輩はどうすればよいのだろうか？ これまでどおりの平凡な日々をおくればよいのか？ 吾輩のいる地球はいつだってそのままでありつづけるし、そこにいるおびたしい衆生のうちにあつて唯一ひとりだけが特別にヘンテコであつてもそれはそれでつまらないことでもなからうし、それなりに一考に値するにちががなく、さもなければ吾輩は兄弟子で、あなたは弟弟子で、どこかに買ひものにかけたとき、バッテリーでくわしたら拱手の札をしたり、あるいは天下太平の世にあつて、由緒正しい帽子をかぶり上着をはおつて、元旦の挨拶をかわし、おめでとうおめでとう、金運アップ金運アップ、そんなふうだったらどんな世界になるのだろうか？ 正直にいうと、吾輩はただこの社会が合理的であること

5 西望長安 白日遙か 半年無事 蘭橈を駐む 将めんと欲す張翰 松江の雨 屏風を画作きて鮑昭に寄す (西望長安白日遙 半年無事駐蘭橈 欲將張翰松江雨 画作屏風寄鮑昭) 韋莊「江行西望」

6 風蕭蕭として易水寒し (風蕭蕭兮易水寒) 『史記』刺客列伝

7 空華は「空中の華。眼を病むもの空に花あるを見る。もと虚空華なし、只是れ病眼の見る所、以て妄心所計の諸相実体なきに譬ふ」(織田得能『仏教大辞典』)

8 鳶飛びて天に戻り 魚淵に躍る (鳶飛戻天 魚躍于淵) 『詩経』大雅「早麓」

9 無明は「闇鈍の心諸法の事理を照了する明なきを云ふ。痴の異名なり」(織田得能『仏教大辞典』)

を願っているだけであって、ひとびとはたがいにイジワルをしたりせず、どんな動物よりもたくさん好いところがあり、とりあえず北京の公園のような感じといえよかろうか、だれもみなヒマをもてあまし、老若男女、花はかおり鳥はうたい、とも生きるよろこびを謳歌しており、吾輩はというと、やつのことでこの境地にまでたどりついたことでもあり、これを捨てることは忍びがたく、吾輩はこの吾輩のままで、ひとりぼっちで万物の霊長として、この高くそびえる人生の塔のうえにたたずんで、泣いたりわらったり、ただ吾輩はこれって居眠りしているだけなんじゃないかということが気がかりで、というもこのような境地はおそらく夢をみない眠りとのみくらべうるものであり、しかしながらこれこそは人生における最高の精神のありかたなのであって、吾輩はこれを久しくたもちつづけることができぬのではなからうかと危惧しており、明日の朝になって目をさましてみればまたぞろ悩みのかたまりになっていて、だれかとかえればそのひとのことがイヤになり、あなたたちはどうしてそんなに愚かしいのだろうか？ たゞし吾輩はさしあたりだれかたであるということもは確実であって、もとより夢のなかでは時間と空間とがなりたっており、それゆえ如来は一瞬のうちに過去・現在・未来の三世をみるのだけれども、明日になったら明日またみるわけで、まさに日を追ってあるいは月を追おっていつのまにか身についてくるからというやつである¹⁰。吾輩はいつおきたいのだが、聖人とはほんとうは凡人であり、経典とはほとんど小説であり、じつのところ吾輩のように聖人をそしるものこそがもっとも道理をわきまえているのであって¹¹、せまい部屋のなかで、くる日もくる日もここにすわって口先だけの空論をうそぶいて、それはまるで子どものころによんだお伽話にでてくる怠けものみたいに、だらしなく横たわり、ときおり足をのばし——おや吾輩のピンを蹴っ飛ばしてしまった！ しまった、割れちゃった！ 目にみえており割れてしまったものは覆水盆に返らずで、耳をそばだてても万籟寂として声なく、いったいどうしたことであろうか？……

莫須有先生はぶつぶつ独り言をいいながらいつのまにか敷居をまたいで自室にもどっていたようで、オンドルのうえで壁のほうをむいて寝そべって昼寝をしていると、せまくるしい部屋のなかにひとり寝るにはでっかすぎるオンドルがあるため、世捨て人ならではの蔵書、いろんなビンや書画、骨董品や玩具など、まったく立錫の余地もないといったふうで、しょうが

ないのでボロボロの寝床のうえにお宝をならべるようにして飾りつけたのだが、今年は雨が多く、天井のいたるところから雨漏りがして、夜中に不安になり、いきなり起きあがって火をともしたり¹²、一生もののお宝たちが不慮の災害にあいはせぬかと心配でたまらず、たとえばこのちっぽけな花瓶だけど、窓ガラスのそばの隅っこにほうりだしてあって、まだ花をさしたこともないのだが、これは普陀山からやってきた長老にいただいたもので、なんでも福建省産の漆器らしく、莫須有先生はちよくちよく気になって頭をもたげてながめやるのだが、そのちっぽけな影はじつに愛らしく、もし月夜でなければ、灯の光によって、それは壁のうえに影をおとしてくれて、それなのにジャマだなあとおもったりして——あらあらなんだ視線をひくくしていたからみまちがえちゃったようで、でっかい人影じゃないか！ この吾輩みずからの影がうつっていて、吾輩は手をのばしてそれにさわってみたくなり、それは鏡にうつる花や水にうつる月のような幻にすぎぬとしても吾輩の経験をいわせてもらうならば、まさか今日こそ今日こそ、吾輩は吾輩は、まるで子どもみたいに、足をのばしてピンを蹴っ飛ばし、それを割ってしまったのである。とるにたりぬことのはずなのにどうしても気になってしまい——そうじゃない、そうじゃない、あなたたちはわかっていない、あなたたちはわかっていない、吾輩はこういう人間なのであって、吾輩はいつだってすぐに機嫌がわるくなってしまふのであって、そのことは吾輩だけが知っており、じつをいうと吾輩がいちばん破り捨てたいとおもっているのは吾輩がかつて気に入っていた自作の詩であって、それはすごい悪事をはたらいたようなもので、いまとなっては自業自得なのだけれども、などといっている吾輩こそは偽善者にほかならなくて、どんなことであろうとも自分と関係がなければどうでもよいとおもっており、ニワトリをつぶして客にふるまうのにも、便宜房の料理人みたいにキレイに下拵えをして、吾輩は君子の屋敷の池の管理人になりたかったのだが¹³、吾輩はその料理人の食べてしまった魚になったことを空想し、そして言語道断にもじつさいの

10 子曰く、回や、其の心三月仁に違わざれば、其の余は則ち日月に至るのみ（子曰、回也、其心三月不違仁、其余則日月至焉而已矣）『論語』雍也

11 君を要かす者は上を無し、聖人を非る者は法を無し、孝を非る者は親を無す（要君者無上、非聖人者無法、非孝者無親）『孝経』五刑

12 厲夜子を生子 遽かにして火を求む（厲夜生子 遽而求火）陶淵明「命子」

ところ他人であれ吾輩であれ衆生はみないっしょのものであって、屠殺用の包丁を捨て、血がダラダラとながれ、豚がひとのたたずむようなかっこうをして鳴き¹⁴、疑心暗鬼におちいり¹⁵、漢朝にはヒトブタというものがあり¹⁶、紂王の妃の妲己はおホホホと大笑いし、かくして莫須有先生は発狂しそうになり、ひとりぼっちの鳳凰が鏡にむかって舞いやまず、とうとう息絶えて……

そして頭を搔きむしりながらなにがなんだかわけがわからなくなり、これが首切り役人であれば一刀のもとにひとおもいに生命をとることもできようが、しかしながら生命という大河は昼も夜もながれつづけてやむことはなく、生きているあいだに意にかなう言葉を吐くこともかなわず、やれやれ、たいていのものは今際の際となればわけのわからぬようになり、わけのわからぬ囁言をもらすばかりで、どうやら吾輩のいまのありさまにはそういう気配がただよっているのではあるまいか？……

そうこうするうちに不思議不思議、莫須有先生がグズグズしていると、とめどなくひろがった思想がひとつところに収斂してきて、大いなる曇りなき鏡のうちに円満するがごとくであり、その鏡にはありとあらゆる文字がしるされておられ、われわれのいる地球を一望のもとにながめてみれば、それはまたわれわれの文字であり

「やれやれ、吾輩は生命というものに忠実であるつもりだが、こうして生命を目のあたりにしてみればまったく無知ではないか」

ひっそりとした山には人影もないが耳をすませば人声がきこえてきて¹⁷——

『莫須有先生伝』はたかが大福帳にすぎぬので、焼き捨ててよろしい」

うしろをふりむいて言葉を添えて

「吾輩は家主の奥さんが帰ってきたら教えてあげようとおもう」

さらに一言を添えて

「吾輩はひととあって話をするのがイヤというわけでもないんだけど、そういうのはただたんに反応しているというだけであって、ちょうどカラッポの空間に音が響いているようなもので、この世には奇蹟なんてものはないのである」

もうこんな時間になっていて、莫須有先生の家主の奥さんはようやくお悔やみからもどってきたのだが、その帰り道で、薄っぺらなおばさんとバッタリでくわしてしまい、ひとまず足をとめねばならなかった。

薄っぺらなおばさんも相変わらずいそがしそうだったのだが、やはり足をとめて、やおらしゃべりはじめ

「おねえちゃん、なんてことかしら！ なんでも楽子ちゃんが死んじゃったっていうじゃない！」

「三番目の妹、うちの妹はほんとうに気の毒で、だってたったひとりの娘がいなくなっちゃったのよ！ あたしはあのひとがおもいつめてしまうんじゃないかと心配で——ええ、あたしはもう疲れちゃって、夜中に起きてからずっといままでバタバタして——三番目の妹、あんたもすわって、あたしたちがおしゃべりしてあげなくちゃ、ほらこの石がいいわ、この石がいいわ」

「あんたもすわってあんたもすわって、——あんなにいい子がなくなっちゃうなんてねえ！ なんていえばいいのかしら？」

「三番目の妹！ 三番目の妹！ なんていえばいいのよ！ あんたが泣いたりするとあなたしはもつとつらくなるわ」

「わあん——おねえちゃん、あんたが逆にあたしを上げましたりすると、なんにもいえなくなるじゃない！」

わあん——おねえちゃん、あたしはもううちの娘をたたかないことにするわ！ あの子つたらずと髪をきりたいて駄々をこねてるんだけど、明日あたりお父ちゃんに髪をきらせることにするわ！」

「それでいいんじゃない？ 子どもにながわかるっていの？ きっと学校にかよっている子たちが髪をきっているのをみてあの子もきりたくなつたんでしょ？」

「おねえちゃん、あたしらみたいな家のものが玉の輿にのれるとおもう？ そんな上流のうちに縁があるとおもう？ どうせ田舎のうちにもらわれてゆくしかないんじゃない？ こんな裸足で駆けずりまわっている

13 校人は「管理池沼の小官。孟子万章上、昔者有饋生魚於鄭子産、子産使校人畜之池。注、校人、主池沼之小吏也」(『辞源』第三版)

14 豕、人のごとく立ちて啼く(豕人立而啼)『左伝』莊公八年

15 杯弓蛇影は「漢応劭風俗通九怪神記杜宣飲酒、見杯中似有蛇、酒後胸腹作痛、多方医治不愈、後知為壁上所懸赤弩照於杯、形如蛇、病即愈。晋書樂広伝也有類似的記述。後因以杯弓蛇影形容疑心暗鬼、自相驚擾」(『辞源』第三版)

16 人彘は「漢劉邦(高祖)寵戚夫人、欲立其子如意為太子、未果。高祖死、呂后斷戚夫人手足、去眼、燬耳、飲[薬]、使居廁中、稱為人彘。見史記呂后紀。亦作人豕」(『辞源』第三版)

17 空山人を見ず 但人語の響くを聞くのみ(空山不見人 但聞人語響)王維「鹿柴」

ようなものを相手にしてくれるとおもう？ おねえちゃん、ほら、いまどきの町の女学生ときたら、シッポのないウズラみたいな頭をしてるってうだけじゃなくて、おまけに裸足なんだよ！」

莫須有先生はこっそり身を隠した孫悟空のようにおもわずプツとふきだしてしまい、そのとき薄っぺらなおばさんは一匹のスズメバチが飛んでくるのをみつけ、威嚇するように大声でどなって、このスズメバチったらひとを刺そうっていうのかい！

「三番目の妹はいそがしいだろうからもう帰っていいよ——晩にまたおいで」

「晩にまたくるわ」

莫須有先生の家主の奥さんは石のうえに腰をおろしたまま起ちあがろうとせず、あたりをボンヤリとみまわし、どこかを見つめるというふうでもなく、なんとなく自分の一生をかえりみているような雰囲気で、ひとの一生っていうものはカラッポの空洞のようなものなんだろうけど、こうして歳をとるにつれて針に糸をとおすようにものごとのなりゆきがわかってくるというふうに、ぶつぶつと独り言をつぶやいて

「うちの銀ちゃん、銀ちゃん、よそのうちの子にくらべてもうんと愛らしくそだってくれて、あの目だけど、うちの裏のお君ちゃんのとそっくりで、莫須有先生もいつもお君ちゃんは器量がよいていうけど、銀ちゃん、あんたは運がわるいのか、どんなにからだの具合がわるくても学校にいきたがって、ほんとうに勉強するのが大好きで、もしあの子が生きていれば莫須有先生にいろいろ教えてもらえたわよね？ 賢い子ほど長生きできないっていうけど、お君ちゃんもきつとそうにちがいないから、あたしはあの子のお母さんでもないのに心配でしょうがないのよ！」

ここにおいて莫須有先生はあたかも全知全能であるかのごとくに感ずるところを如是我聞というふうにい

「うむ、うむ、親子の情愛、隣人の嫉妬」

「莫須有先生がもう帰ってきたんじゃないの？ あたしはあの立派なひとをみるとガンバラなきやっておもうんだけど、もうこんなに遅いからお腹が空いているんじゃないかしら？」

「家主の奥さん、あなたも帰っていたとは、吾輩はもうずいぶんあなたとおしゃべりしていないような気がするのですよ」

「おや、莫須有先生、いったい今日はどうしちゃったっていうの、なんだか顔がやつれているけど、もしあたしの陰でいっていることが耳にはいったとしても

気にしなたっていいんだからね」

「あなたの話をきいておもいだしたことがあるんだけど、たしか去年の今日だったか吾輩はかつての学友から手紙をもらったことがあって、それは吾輩がおくった吾輩の近影にたいする返信で、そこには吾輩がかきつづけている大作について、たいへん元気ハツラツとしているが、それにひきかえ吾輩のうつった写真のほうは病人みたいだとあって、そんなふうにいわれて吾輩もいろいろおもうところはあったのだけれども、いまこれからあなたのために俗っぽい言葉で語ろうとおもっているのは生き別れおよび死に別れということなのです」

こういってみたら、わらいながらも涙がでてきた。

「なにをいっているの？ 莫須有先生——莫須有先生！ あんた、あんたそんなおそろしいことをいわないで！ あたしのいうことをきいて！ ちゃんときいて！ あんたはギリギリの崖っぷちでふみとどまれるひとで、去年のある夜にあんたは山のほうにでかけていって、あたしはあわてて提灯をもってあんたのことをさがしまわるといことがあったけれども、すんでのことで一生を棒にふってしまうところだったけど、あたしはあんたをつれてもどってきて、それから一年たつあいだにあんたはたくさん仕事をしたわけで、このことはあたしのほかはだれも知らないけれども、だから今日になってそんなバカげたことをいいたさないでほしくて、きいてちょうだい！ ちゃんときいてったら！」

「今日のことは、いわゆる捨身飼虎といおうか、はたまた一葦渡江といおうか、これはもうまったく精神における問題なのであって」

「あらまあ、ほんとうにそうだわ、あたしもまたそんな感じがしてきて、きざはしのトラもおとなしいってうけど¹⁸、あたしもひとつもおそろしくはなくて、この世のものごとはなんでもおもしろがればよくて——莫須有先生！ 莫須有先生！ あんたはこれからもずっとあたしに道理をおしえてくれなきやいけなくて、あたしがもうすこし進歩するのを見てくれなくちゃいけないのよ」

「なにごとも無理をしちゃいけません」

「なんでそんなに気がみじかいの！ もっとゆっくり考えましようよ」

「吾輩は生まれつき気がみじかいから、いまさらどう

18 窗外に鳥声聞こえ 階前に虎心善し（窗外鳥声聞 階前虎心善）王維「戲贈張五」

しようもない。どうか吾輩のかわりに世のなかに伝えてほしい、かくして『莫須有先生伝』は麒麟があらわれて擱筆するという仕儀にいたったが¹⁹、これより世のなかには和気藹々となり、この世から俗情がキレイさっぱりなくなることをひとびとのために祈ろうではないか」

「じゃあ、さようなら」

「おしあわせに！」

「おしあわせに！」

(2021. 8. 2 受理)

19 獲麟とは「公羊伝哀十四年、西狩獲麟。孔子曰、吾道窮矣。伝説孔子作春秋、至此而止。唐李白李太白詩二古風之一、希聖如有立、絶筆於獲麟」(『辞源』第三版)